

兵庫の女

武田繁太郎
え・松岡寛一

K
Matsumoto



第十一章

まつをはかたぢ屋の店をはじめたときから、「一日も早よう税金を払う身になりたい」というのが念願であった。

もちろん、汗水たらして稼いだ金を、なにも好きこのんでお上にさしだしたい、というのではない。ただで取られる税金など、ピタ一文だって吐きだしたくなかった。しかし、普通選挙がまだおこなわれていなかつたそのころでは、選挙権は、所得税を十五円以上納めているものだけにかぎられていた。

ちょうど良治が生れた大正八年に、全国に普選運動がおこり、所得税は十五円から三円に値下げされたが、そ

★あらすじ
まつをは15才で広島の生家をとびだして神戸にきた。そこで安福利市と結婚。鐘紡に共稼ぎで勤めるかたわら内職につけみ、貯えた金で兵庫御崎本通りに呉服の店“かたぢ屋”をひらいた。大正と年号も改まるころ、今ではかたぢ屋も御崎本通りで押しも押されぬ大店となり、そのうえに、結婚以来二十年、恵まれることのなかつた子宝にも恵まれて一粒種の良治が生れた。良治は仕事に忙しく子にかまうことの少ないまつをよりも父になつく子供であつた。

れでも、三円の税金さえ取られていない貧乏人が、まだまだたくさんいた。

そういう貧乏人は、お上から選挙権を持つ一人前の日

本男子としては扱つてもらえなかつたのである。

因みにいえば、所得税の制限が撤廃されたのは、大正

も末年になつてからであり、はじめて普通選挙がおこなわれたのは、昭和三年の総選挙のときからであつた。

だが、明治から大正の初期にかけては、選挙権を持つているものは、貧乏人とは種族のちがう有産階級、特權階級とみなされていたのだ。

「良人にも早よう選挙権を持つてほしい」

と、まつをが願つたのもむりからぬことだつたし、当の利市もまたおなじ思いであつた。

だから、念願かなつて、はじめて納税通知書が舞いこんできたとき、まつをの喜びようは、良人以上であった。

うすすべらな通知書をおしいただき、日ごろはろくに見むきもしない神棚に、この日だけはうやうやしく供えて、いくどもいくどもあたまをさげた。

「あんたもこれで、ようやつと男になれたんやなア！」

しみじみとした声で、まつをが良人の顔を仰ぐと、

「いやいや。これもみんな、おまえのおかげや」

と、利市はちよと照れくさそうにはにかんだ。事実はそのとおりであった。だが、まつをは、即座に首をふつた。

「なにをいうとつてのや。あんたが酒も煙草のままで、女道楽もせんと、真面目一本に働くくれたおかげやないか。それになア、おなごがなんぼ出しゃばつたかて、やつぱり、出るところへ出たら、男やないとあかんわいな」

まつをは、ほれぼれとした眼差しで、いつまでも良人の顔をみつめていた。

これも苦闘時代のたのしい思い出である。そして、いままでは、もちろん、利市は、この御崎本町では上からかぞえられるほどの納税者になり、商店街のだれからも一日おかれる存在になりあがつていた。

「安福おるか。ちよつと話があつてきたんや——」

ある夜、近所の紀州屋酒店の船田辰次が、ぶらりとか

たち屋の暖簾をわけてはいつてきた。

「なんや。きゅうにまたあらたまつて。また、なかへはいりいな」

利市は奥の客間に船田を招じいた。

この御崎本町の開拓時代から苦勞し、今まではひとつどの成功をおさめている商店も幾軒かあつた。

北からいえば、外墓(そとぼ)の斜め向いの角にある中橋家具店その二、三軒となりの阿部精肉店、南にくだつて、御崎

薬局、かたぢ屋呉服店、それに、紀州屋酒店等々。阿部精肉店なども、さいしょはただの肉屋だったのが、店舗をひろげ、二階をすき焼きの座敷に改造し、このごろでは界隈きつての料亭になつていた。

利市は、このなかでも、中橋家具店の中橋善三郎と、いまたずねてきた紀州屋酒店の船田辰次とは、むかしからなんとなく馬があい、商店街の連中からは「三人組」となどと呼ばれるほど仲がよかつた。

「じつはな、安福にぜひともひと肌ぬいでもらわんならんことになつたんや」

船田は、まつをがすすめる茶をすすりながら、ひと膝をじつていつた。

「ほほオ。なんや、また——」

利市は、おうようにうなづきながらも、ちらりといぶかしげに相手の顔をうかがつた。

船田は、商人としてはなかなかのやり手だったが、悪い癖で、女のほうにかけてもひどく手が早かつた。現に四、五年まえに先妻がなくなると、すぐ後添えに迎えた女も、福原の芸者あがりで、そのうえ、永沢町あたりに手かけもいるらしいと、もっぱらの評判であった。そのため、まつをなども、そういう身持ちのよくない男と良人が付きあうことを、内心ではにがにがしく思つていた。(船田のやつ、なんぞのこととでしくじつて、その後始末をたのみにきよつたんかな?)

「いや。ちがうちがう」

「三人組」の一人である中橋善三郎が、こんどの市会の選挙には、どうあつても立候補したい、といつてきかぬというのである。

「なんや。あいつ、まだそんなこというてるのか。仕様ないやつやな！」

利市は、ふっと肩をおとしていった。

「うむ。わしも口を酸っぽうして、やめとけいとんやけど、どうにもききよらん」

船田も匙を投げたようにいう。

船田が女道楽なら、中橋は政治道楽であつた。男も四十をすぎて、多少の蓄財もできると、えてしてこういう道楽に走りたがる。「三人組」のなかで、なんの道楽もしていないのは、利市ひとりであった。

「けど、市会になぞうってでて、いったい、勝味はあるんか」

「いや。むつかしいやろな。そら、県会の浜田はんの後ろ橋はあるやろけど、この辺は、憲政会の川本はんががっしおさえとるさかいなア」

船田は悲観的であった。

浜田は国民党所属の県会議員で、中橋はその子分の人になつてた。もともと浜田自身がこの辺に地盤を持つてない。その地盤開拓の意味からも、浜田は、こんどの市議戦に子分の中橋を出馬させようという肚であるらしかつた。苦戦はさいしょからわかりきついていた。

「中橋のやつ、やめときやええのになア。錢使うて、恥かくだけやないか」

「うむ。けどなア、本人がどうあつても立つと決心している以上、そうなつたら、わしらとしても放つとくわけにもいかんやろ？」

「うむ。そらそうや。こっちらの考えがどうあらうともしておきまほか」

まつをも負けずに腰を浮かしかけると、船田はもういちどあわてて手をふった。

「いやいや。いまのは冗談や。この話は、まつをほんにもきいといてももうたほうがええんや。じつはな——」



カンのいい船田は、素早く利市の胸中を見抜いたよう

に、あわてて手をふった。

「堅物の安福に、まちごうても妙な話は持つてこんわ。

とくにこうしてまつをほんの目のまえではな」

「あらあら。お相憎さん。ほんなら、あたしは座をはずしておきまほか」

まつをも負けずに腰を浮かしかけると、船田はもういちどあわてて手をふった。

「いやいや。いまのは冗談や。この話は、まつをほんにもきいといてももうたほうがええんや。じつはな——」

利市も大きくうなづいてみせた。

「そこでや、わしらも応援するとなると、ます必要なのは軍資金や。中橋のやつ、店はああして派手にやつとる

けど、内実は、見た目ほど楽やない

「うむ。いままでも政治道楽にだいぶ入れあげてるしなア」

いいながら、利市は、ふとまつをの顔色をうかがった。
軍資金の面倒をみると、百や二百の金は覚悟しなければならない。もちろん、現在のかたち屋なら、その程度の金は出して出せぬ大金ではなかつた。だが、肝心のまつをが商売一点張りで、政治などにはなんの関心も興味も抱いてはいなかつたのだ。

「これが憲政会あたりなら、親分が身ぐるみ子分の面倒をみてくれるんやろけど、国民党は貧乏やし、浜田先生も金には縁のない政治家や。いつの選挙でも、運動員は手弁当で走りまわつとる」「へーえ？ 浜田先生いうたら、そんなに貧乏な議員さんだつか？」
それまで二人の男たちの話を黙つてきいていたまつが、とつぜん、驚いたような口調で船田にたずねた。
「そら、浜田先生だけやない。だいいち、国民党の親分の犬養先生にしてからが、いつもビービーや」

「へーえ。政治家いうたら、舌先き三寸で金のなる木を

つかまえて、豪勢な暮しをしてるのかと思うてた」「いやいや。そら、そういう政治家もおるけど、犬養先生はちがう。なにしろ、清貧できこえた、りっぱな人格者や」

「ほんなら、浜田先生はそういう犬養先生の子分で、中橋はんは、そのまた子分いうわけやな」

「うむ。そのとおりや」「それで、中橋はんは、貧乏な国民党から立候補して、負けるのん覚悟で戦かういうわけやな？」

「うむ。まあ、そうやな」「へーえ？」

「そうつぶやきながら、まつをは、しばらく小首をかしげて、思案にふける風情であつたが、やがて、なにを思つたのか、つと座をたち、そのまま、座敷からでていった。

「おいおい。こんな話きかして、山の神、二三氣難を損じたんとちがうか」

船田が案じ顔で利市にささやきかけると、「うむ」と、利市も、腕組みをしたまま、おびえたように、まづをの去つていった襖のむこうに目をやつた。(つづく)

★神戸の催物ごあんない★

▷メサイヤ

12月23日 PM6.30～PM8.30 会費 ¥300。主催／神戸中央合唱団・コロボルテニオ 於神戸国際会館

▷ザ・スパイダース神戸公演

12月26日 PM3.00～PM5.00 PM6.00～PM8.00の2回 前売券 a ¥600 b ¥500 c ¥400 当日券 a ¥700 b ¥600 c ¥500 シャープ・ホークス、シャープ・ファイブ共演 主催／神戸新聞会館、於神戸国際会館

▷第3回法政大学軽音楽フェスティバル

12月27日 PM2.00～PM5.00 PM6.00～PM9.00の2回 ¥300。主催／法政大学神戸クラブ 於神戸国際会館

▷初笑い寄席名人会

正月1日～8日 正午とPM4.30の2回 指定席 ¥400
自由席 ¥300 前売券 ¥250 入れかえなし。主催／神戸国際会館 於神戸国際会館 出演は川上のぼると大阪ヤローズ、桂米朝、日吉川秋斎、鳳啓助京唄子、ルーキー新一、白羽大介など多彩な顔ぶれで新年を飾ります



▷ピーター・ポール・アンド・マリー神戸公演

1月9日 PM6.00～PM9.00 a ¥2200 b ¥1800 c ¥1400 d ¥1000 主催／アートプロ 於神戸国際会館

▷民芸公演『瀬戸内海の子供ら』三幕

1月12日～14日 每夕PM6.15から 出演／宇野重吉、細川ちか子、垂水悟郎、北林谷栄ほか 主催／神戸労演 於神戸国際会館

サ愛
口讀
ン者



神戸追憶

千種菊之助

「神戸っ子」ひらけば北野坂道の異人屋敷に夾竹桃いまもオリベヤはオリーブヤードの意味の園劬頃の山本通よ

藤棚に並みて諱訪山金星台
星あこがれぬその日は遠し
フランスの船長たりしエック氏
童顔うかぶ北野コートに
ドック見え松方さんの馬車馳せり
怖れわさけぬ学校のゆきき
(大津市唐橋町六の二木田仙治
昭和二十年戦争にて会社解散する)
★六甲おろしが、きびしく吹きつ
いて毎日、編集室の元、お元
気ですか?月に一度、送り届けて貰
っている「神戸っ子」。発行日が近

お世話いただいたい方々

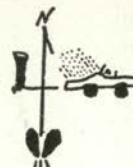
木柏嘉嘉金大小岡岡牛上榎石乾砂有浅荒朝青安
曾比下井納井淵野根崎部崎尾田並野 野岡田木奈木部

健毅正元ツ一真 伊真吉将正成豊 信長 重正
ト都繁一六治彦ム夫造忠子一朗雄一明彦仁道平見隆雄夫

玉田田田滝瀧竹砂末塩新白雀阪阪古後上小小小
井中中村宮川川中田 正路谷川部口本林藤林林泉林磯
久

健寛孝虎勝清 重左義秀 昌干 喜末英秀徳芳良
一之操郎次介彦二郁民門孝雄澤介雄勝栄二一雄一夫平

神山若百宮宮松福深原畠原野中直永外竹津
戸青口杉崎地崎井富水 口沢西木井島馬高
年会泰辰襄辰高芳惣泰専忠幸 太達健準
所弘慧雄二雄男美吉良郎郎勝郎七吉助一



神戸っ子ごあんない



★月刊神戸っ子を毎月お読みになりたい皆さま、また神戸をおとどけにお友達には、編集室あてにお申込みになればさつそくお送りいたします。

6力月分 六五〇円

1年分 一三〇〇円(送料共)

は左の本屋さんでどうぞ。

大口こうべ書籍部屋

東京神戸丸大丸五
書房セセナタ筋街階層

神戸市葺合区御幸通

TEL(2)703777
3777
100円

編集室

神戸っ子をお買い求めの時に

★月刊神戸っ子をお読みの時に

神戸の銘店には、お客様へのサ

ビスとして神戸っ子がおかれていま

す。

★月刊神戸っ子を紹介されてい

る、

神戸の銘店には、お客様へのサ

ビスとして神戸っ子がおかれていま

す。

★月刊神戸っ子をお読みの時に

神戸の銘店には、お客様へのサ

ビスとして神戸っ子がお

△対話 12ヶ月▽ その一

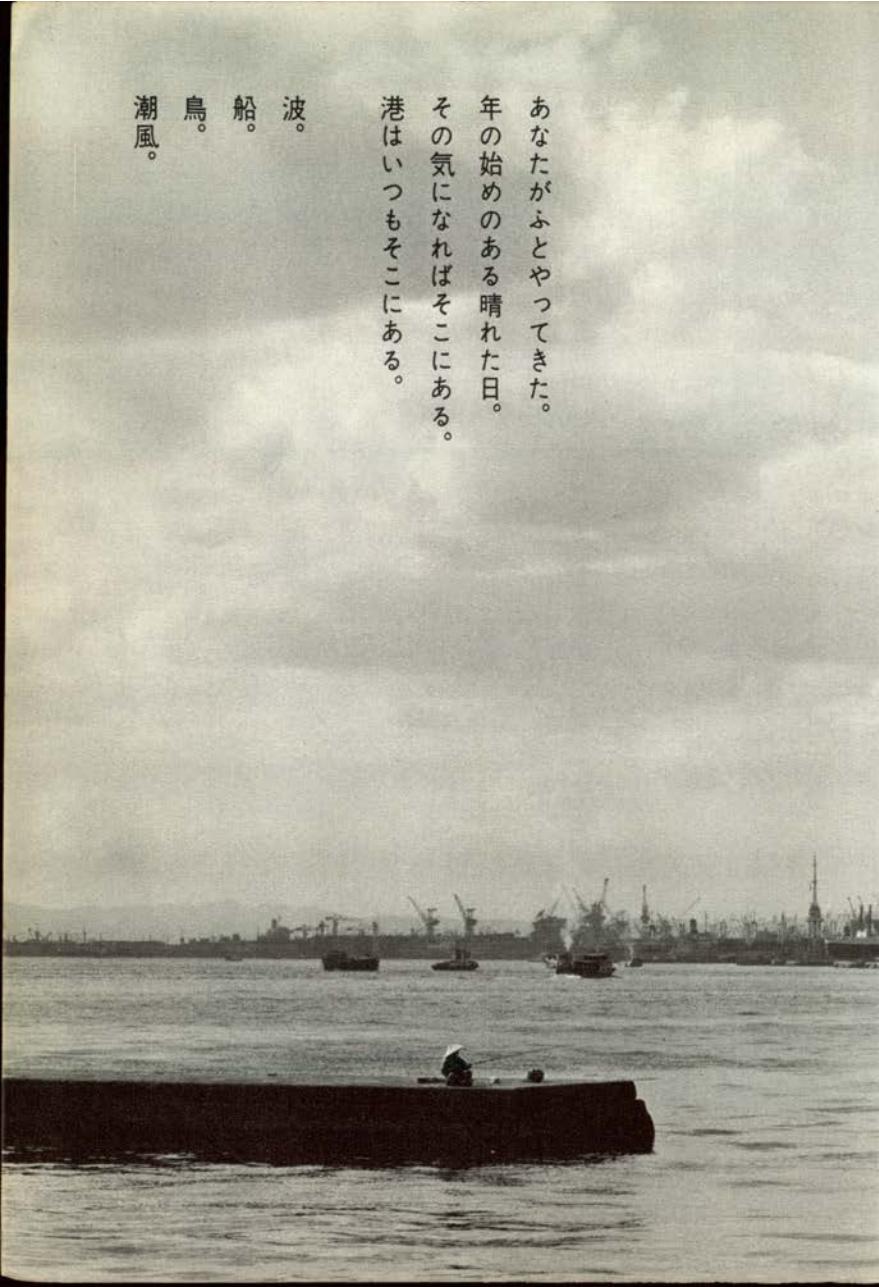
かもめと船

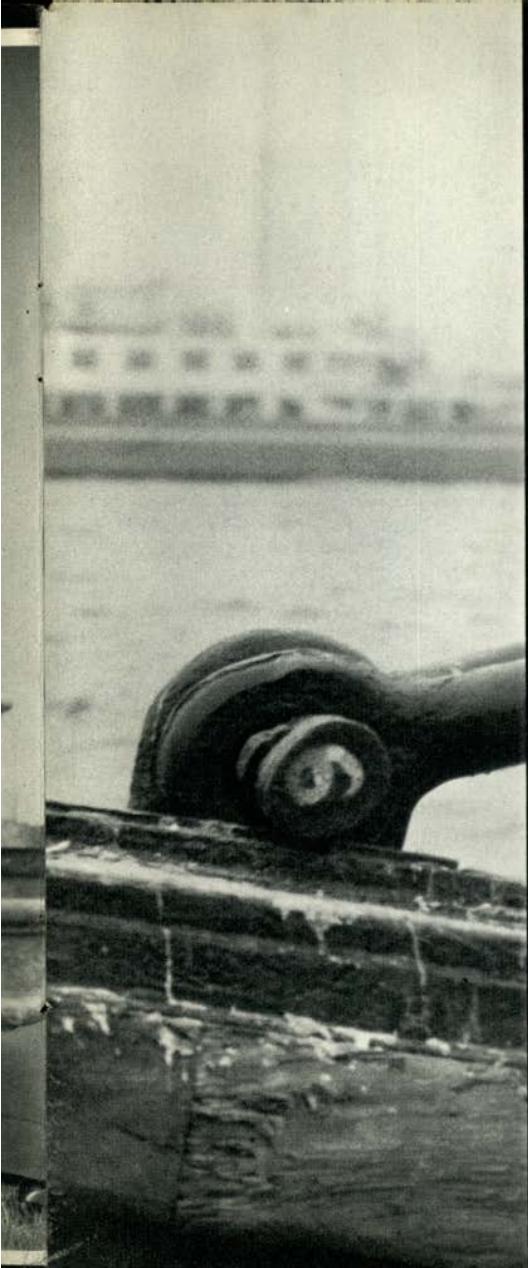
対話／安水稔和
カメラ／緒方しげを

神戸といえば港。あたりまえすぎてばかばかしい位だが。
だが、神戸にいても港へ来たことのない人もいる。
港を見ることもなくその日その日を過している人もいる。
そんな人々の一人であるあなた

あなたがふとやつてきた。
年の始めのある晴れた日。
その気になればそこにある。
港はいつもそこにある。

波。船。鳥。
潮風。





だが
あなたは
あなたのおもつてていることしか見はしない。
あなたのおもつてている以上のことを聞きはしない。
どこへ行つても。

Seagulls :

「どこへ行くの?

「どこまで行くの?

「どこまでも行けるの?

「ぼくは、とまって、とびたつて

とまつて、とびたつて……

とぼくは、せつせと、とまつて

とびたつて……

「どこへ行くの?

「答えて。」

Ships :

「ちいさくとも、おおきくとも

同じなんだね、小さな小鳥さん。

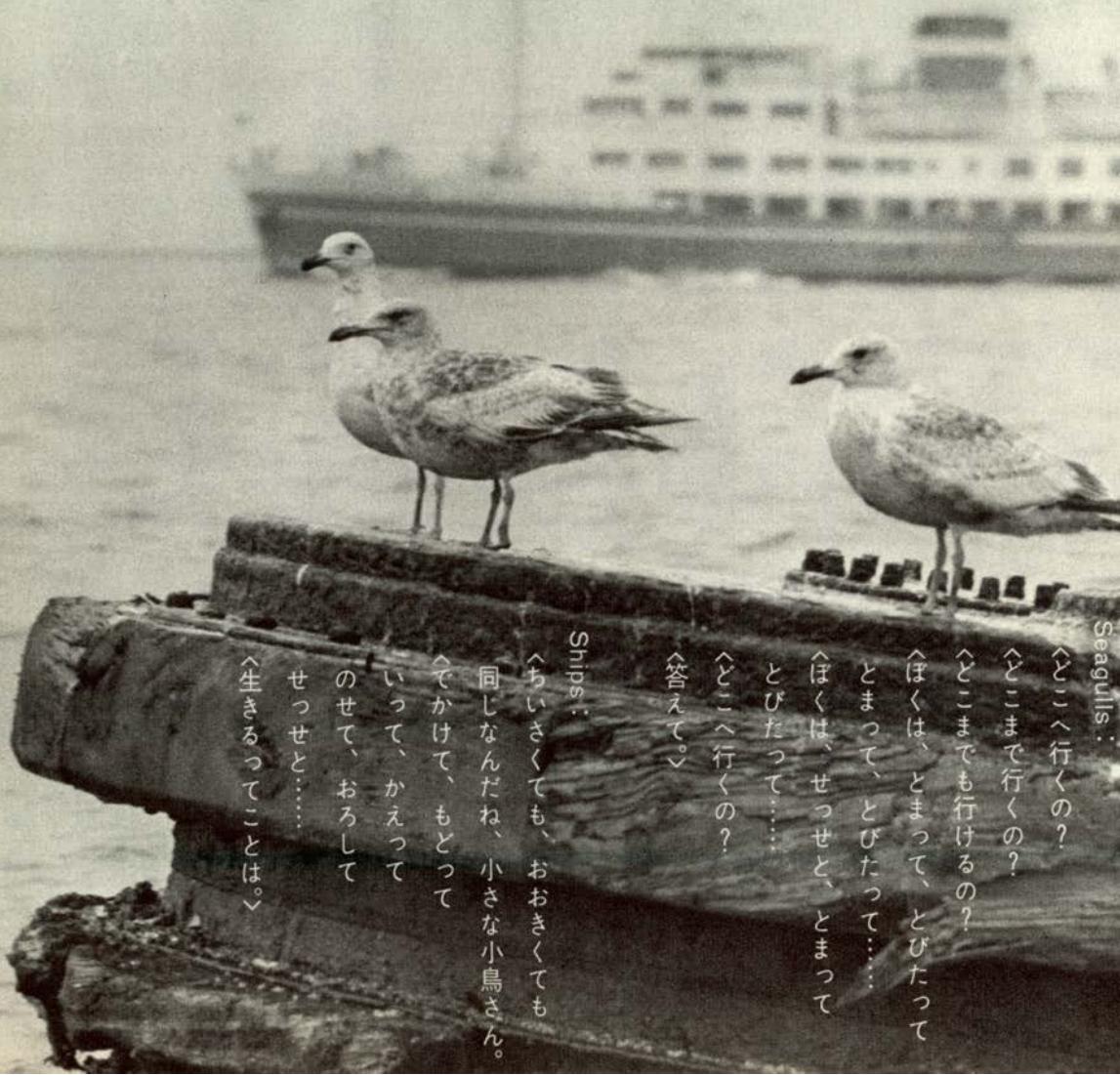
「でかけて、もどつて

いって、かえつて

のせて、おろして

せつせと……

「生きるつてことは。」





銘店抄その33

赤根和生

（美術評論家）

若木屋・元町画廊
元町一丁目

画商という商売は扱かうものがものだけにとりわけ信用が大事だが、深い経験に支えられた主人の眼力、その感覚と肚に対する信頼が大きくなる。佐藤さんは「これらの画商は絵かきの側に立たなければ」という先代の指示で帝国美術学校を卒業しているだけに、普通の商人とは少し違う。商品としての絵画を扱いながらも、一方では「兵庫県選出10人展」や「現代日本作家展」などを主催して、新らしい絵画を一般に紹介するとともに、作家の味方として新人たちをおしだしてゆくことに意欲を示してきたこともその表われである。美術ブームなどと呼ばれる近頃、いわゆる画廊と呼ばれる店が生れては消えてゆくのだが、大正七年創業のこの店は既に半世紀の風雪のなかを生きぬいてきた文字通りの老舗だ。長い歴史の支えと現代を呼吸する若さ……、二年のうちにこの一角がビルになつたら階もギャラリーにして個展などに使いたい、というのが佐藤さんの夢だが、神戸では唯一の本格的な、画商らしい画商だけに、その活躍に期待するところは大きい。

（写真は左、佐藤公彦氏）
右：著者の赤根和生氏

銘店抄その 34
赤根和生（美術評論家）

元町五丁目
ハナワ・グリル



主人の花輪さん自身油絵を描く日曜画家だが、グリルの壁には著名画家たちの作品コレクションが沢山かかっている。こんな所で食事をするのは楽しいものだ。運命とは不思議なもので、絵描き志望で外国へゆきたくて横浜をぶらついているうちに、絵筆を握るはずの手に生涯フライパンをもつ身になってしまった花輪さんだが、横浜で仏人ジョンソン氏の下で修業して以来各地のホテルを歩き、神戸で自分の店を開業したのは満州から引あげてきた昭和二十一年のことである。こここのフランス料理は既に定評があつて、これから寒い季節にはサフランを使つたブイヤベースなど絶好だが、満州時代に仕込んだボルシチなどロシヤ料理もうまい。煮込みものは特に料理人の誠意と愛情が敏感にわかるものだが、絵描きがカバンスに向うような気持でステップの前に立つ花輪さんの作つたものには格別のコクがある。「料理も芸術と同じよう」にキリがなくて奥が深い」とは築きあげられた五十年のキャリアの上にいまだに研究を怠らない花輪さんの含蓄ある言葉だ。

（写真は右・花輪勝敬氏
左・著者の赤根和生氏）

Hino

January Spot '67

新年おめでとうございます

昨年11月19日、創業30周年を迎え同時に、社屋改裝の披露を取り行いました。



皆さまのご支援とご愛顧により、おかげさまで弊社は社歴30年を迎えることを得ました。ここに厚く御礼を申しあげます。時あたかも、神戸市の都市計画と、神戸高速道路の完成を間近かにひかえ、弊社周辺はまったく面目を一新しようとしております。その中心部に位置する弊社もこれにともない、社屋の近代化をはかり、事務・現場を通じ作業機能を向上し、いっそうお客様のご便宜を高める体制をとのえました。

兵庫日野自動車株式会社

大代表 TEL ⑤ 2281

30年という里程標を過ぎることの意義を深く心にきざみ、今後はさらに、より良き製品とサービスを提供し、ご使用者の皆さまと共に繁栄への道を進んで行きたいと存じます。

後藤 末二

1967年 謹賀新年



結納儀式用品

合資会社*遠藤福寿堂 *創業35周年

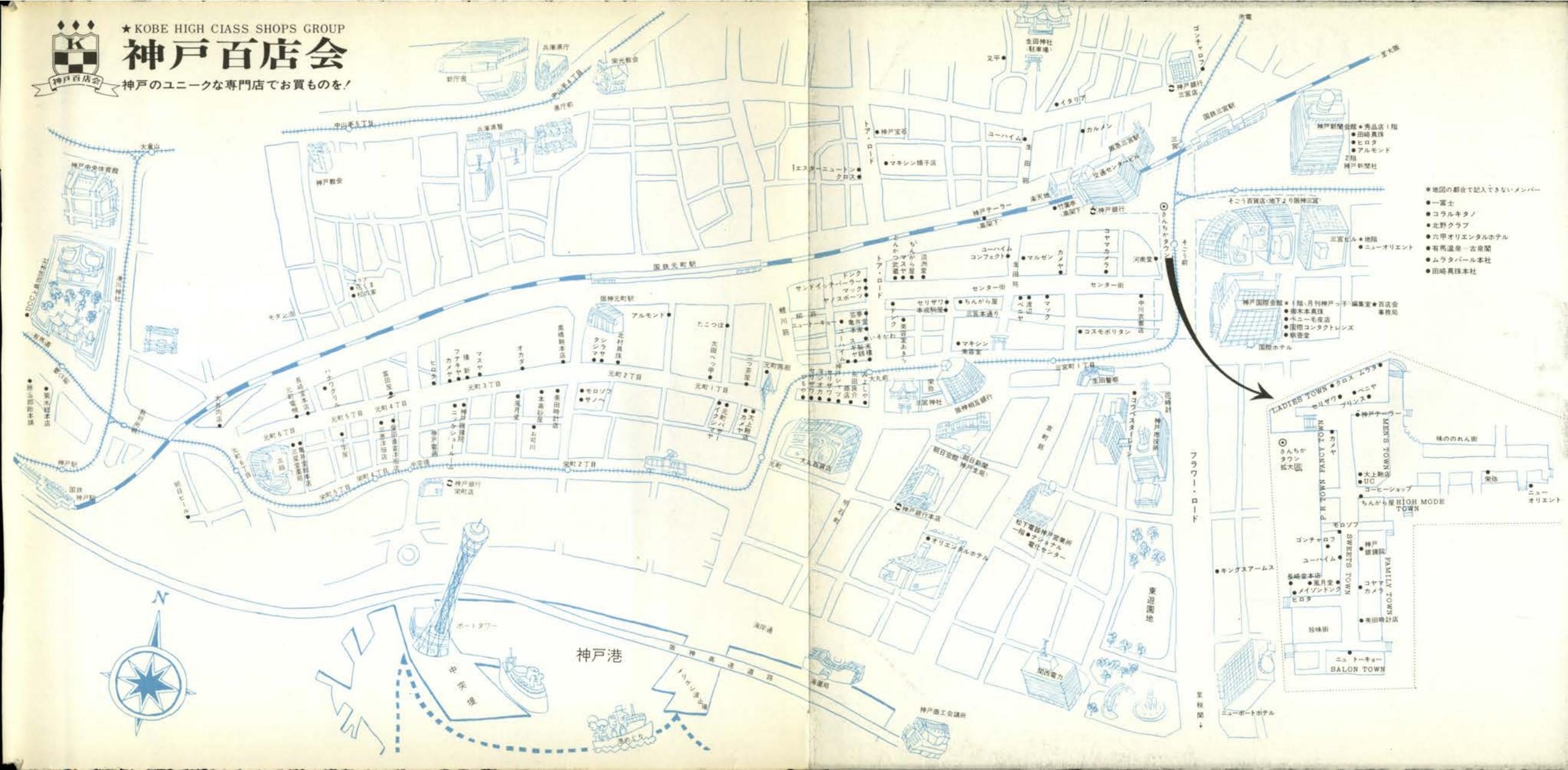
東店=神戸市生田区トア・ロード高架上るTEL <39> 1871-3/西店=神戸市長田区市電菅原停東入るTEL <55> 2251-3



★ KOBE HIGH CLASS SHOPS GROUP

神戸百店会

→神戸のユニークな専門店でお買ものを！



あけまして
おめでとう
ございます



神戸銀行

東宝／内藤洋子

●百店会でのお買物は神戸銀行のホーム・チケットをご利用ください。

昭和四十年一月二十日 発行所／神戸市兵庫区御幸通八丁目九ノ一 神戸国際会館一階 TEL 2270-337 頒価一〇〇円
第三種郵便物認可 昭和四十一年十二月十五日発行 毎月一回 大日本印刷株式会社 編集発行／小泉康夫（送料18円）